

パン、という音がして目がさめると、まだ7歳の弟がクラッカーを鳴らしていた。ベッドから飛び起きた僕は時間を確認する前に何が起きたのかを確認する。早朝の薄暗い部屋で弟がクラッカーの残骸を持つてきやつきやと笑っている。まだ何が起きてるのかわからなかった。

「お誕生日おめでとう」

弟が少しも悪びれずにそう言うので、寝ぼけていたのも相まって僕は素直に「ありがとう」と答えてしまった。弟は嬉しそうにスキップしながら部屋から出て行った。時計を確認すると、時刻はまだ5時だ。確かに今日は誕生日だったが、弟がなぜこんな早くにクラッカーを鳴らしたのかは未だに理解できなかった。僕はぼうつと考えながら弟が放ったクラッカーの糸くずを取りながら目覚まし時計を見ていた。目覚ましになるまで後二時間くらい余裕があった。僕はまた枕に頭を置いて、暖かい羽毛ぶとんに潜り込んだ。

弟はそういったずら好きと言うわけでもなかった。どちらかと言うと真面目な方だったし、僕と違って将来を期待され、小学校のお受験をするくらいに賢い子供だった。それがどうして早朝にクラッカーを鳴らすような奇行に出たのか、僕は不思議で仕方なかった。何か今の生活に不満があるんじゃないか。せつかく入った小学校でいじめられてるんだろうかと、色々想像を膨らませながら朝食を食べる弟の方を見る。制服をピチツと着て美味しそうにご飯を食べる弟はとてもそんな不満を抱えているようには見えなかった。ただの出来心か？ 兄として怒った方が良いのか？ などと考えを巡らせていると、「早く食べなさい」と母に注意されて我に帰る。煮え切らないまま朝ごはんを書き込むと、学校へ行くために外へ出た。

学校でも覚えていてくれた友達がおめでとうと言ってくれたが、その度に弟の奇行を思い出して僕は悩んだ。何が弟をそうさせたのだろうか？ ひょっとして僕か？ 僕が弟に何かしてしまっただろうか？ そう言う考えも浮かんて僕は近頃の弟に対する態度を改めて思い出して見た。昔だったら弟が当たったレアカードを騙して弱いカードと交換したりもしたが、最近は何もしていなかった。弟は弟で色々忙しそうだったし、僕が中学生になってから部屋も分かれるようになった。お兄ちゃんお兄ちゃんといってきた昔の弟を思い出すと、何か寂しい気持ちになって僕はため息をついた。考えれば考えるほど、弟の奇行の動機が気になって学校ではずつと上の空だった。あつという間に授業も部活も終わり、僕は一人で家路に着いた。

学校は家のすぐそばだった。僕はわざと反対側の正門から出て、ぐるりと回って帰って行く。弟は多分もう帰っている。僕はぐるぐると考えすぎて弟とどう接すれば良いのか、わからなくなってしまった。ゆっくり、ゆっくりと歩調を緩めても、いつかは家に着いてしまう。門の前に着くと、僕は少し緊張した。ゆっくりと鉄の門を開けて家の敷地に入る。

ああ、もう帰りたいと思ったが、帰りたいと言っても、家はここなのだ。僕はもう観念して、鍵を回してさっさとドアを開いた。

パンっ、と音がして驚いた。

「誕生日おめでとう!」

玄関にはクラッカーを構える母と弟が立っていた。僕は呆然として、玄関に立ち尽くしていた。

「何これ?」

「だって今日、お兄ちゃん誕生日でしょ?」

弟は笑っていた。母は僕の不思議そうな顔を見て微笑んでいる。

「あなた、夕方のこの時間に生まれたのよ。彰人にそれ教えたら、張り切って『時間ぴったりにお祝いする』って言って聞かなくてね」

僕は驚いたまま、「でも朝彰人が」と言うと、

「生まれたの、夕方の5時なのよ。5時って言ったら、はりきりすぎて勘違いしちゃったのよね?」

と弟の方を向いて言う。弟は「うん、ごめん」と言っていて笑う。

「誕生日おめでとう!」

僕は誕生日を二回祝われた。